

## コンセプト

# 愛される建築を目指して

Architecture, a place of mind

## 愛される建築とは

- 分節的というよりは、有機的
- 組み立てるといよりは、生まれ育っていく
- 美しいというよりは、愛おしい
- アノニマスというよりは、個性がある
- 人工物というよりは、生き物のような
- 「ある」といよりは、「いる」

東日本大震災以降、地域におけるつながりや、ともにつくる大切さが見直されている現在もなお、都市では新たな開発が進み、均質で管理された空間が再生産され続けている。発注者や設計者の顔は見え、施工は複雑・分業化し、誰も知らないところで建設が進んでいくことで、建築はますます人々から遠ざかり、人々を孤立させている。現代において、果たして建築は愛されているだろうか？

一方で、互いの違いを認め、違いを大切にするインクルーシブな考えが芽生えてきたことで、一つの価値観が全体を覆うのではなく「個」から出発した小さな共感の輪が重なりあいながら、全体を包摂していく社会へと変化していく兆しが見られる。そのような社会では、均質化や効率化から離れた、個性的で寛容な建築が必要となるはずだ。それらを仮に「愛される建築」と名付けたい。

建築は通常、人や自然から離れた人工物だと思われるが、ふとした瞬間、それらに生命が宿るように感じることもある。例えば、縄文時代の竪穴式住居や、茅葺き屋根の民家を見ていると、どこか毛むくじらの動物がうずくまっているような、あるいは蓑を来た旅人が一休みしているような様子を連想してしまう。そのように、部材を組み合わせたというよりは、撫でてみたくなったり、体温が感じられたり、自分の思い通りにならないところがある、生き物のような建築を考えてみるころから、建築を捉え直せないだろうか。

建築が自らの意志を持ってそこに佇むような、寛容であたたかく、多くの人が自然と巻き込まれる「愛される建築」の可能性を、ともに考え、深めていくことが本展示の狙いである。

## 展覧会の基本構想

### ヴェニス・ビエンナーレ日本館を通して「愛される建築」を考える

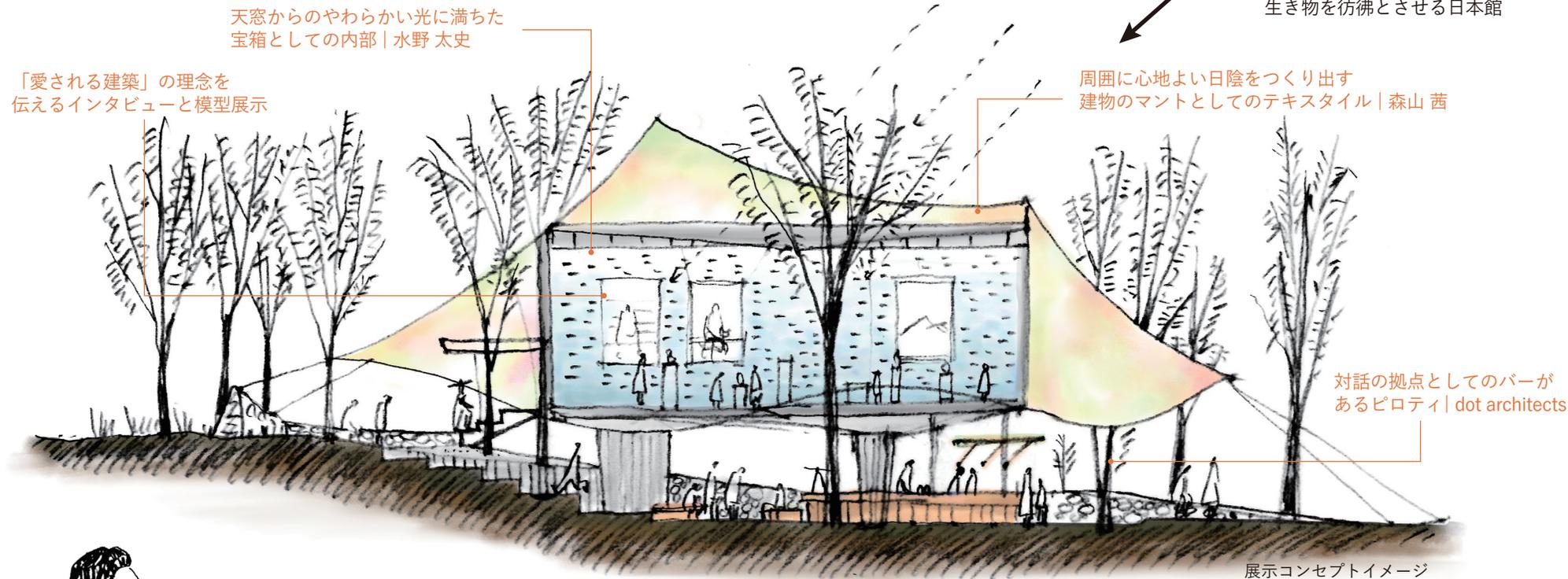
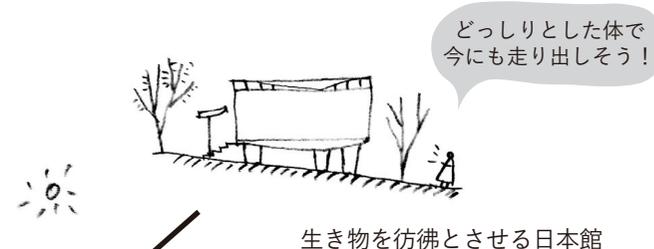
私たちは、ヴェニス・ビエンナーレ日本館そのものを展示物と捉えます。

パビリオン自体が「愛される建築」を体現し、言葉を介さなくても、空間体験として感じ取ることのできる展示です。

吉阪隆正設計の日本館と応答することで、建築に込められた魅力を引き出し、紡いできた時間に物語を重ねていきます。

#### ● なぜ日本館そのものを展示物に？

コンクリートでできたピロティ形式の日本館には、生き物を彷彿とさせる、あたたかさや生命感があります。設計建設プロセスを紐解くと、風土を読み解き、たくさんの思いが重なり合っにつくられた建築であることがわかりますが（付録参照）、長い年月を経る中で、建築そのものへの気づきは薄れているようにも感じられます。日本館をゆっくりと愛でる空間体験、「愛される建築」について考える資料展示を通して、来場者それぞれが「愛される建築とはなにか」を考える展示を目指します。



吉阪隆正

「ものを作るとはそのものに生命を移すことだ」

「有形学」を考えた動機は人類が平和に暮らせるようにとの願いだ〈生活とかたち〉 1980年

「物体は通じる。造形は通じる。これは黙っていてもいい。｣〈吉阪隆正対談集 住民時代君は二十一世紀に何をしているか〉 1979年

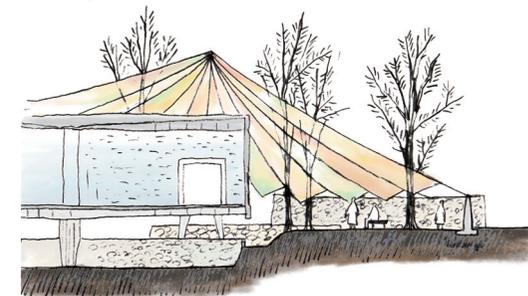
展示は以下の3つの場所から構成されます。

## 1. 人々が自然と近寄りたくなる、やわらかさや生命を感じさせる佇まい

外観

「愛される建築」にとって、その佇まいはとても大切だと考えます。

日本館にふんわりとテキスタイルのマントを着せて、建築の佇まいを、思わず近寄って見たくなるものに変化させます。テキスタイルによる庇は日陰をつくり出すとともに風を可視化することで、心地よい人々の居場所を生み出します。テキスタイルは、繊維をつくる過程から福祉施設との対話の中でつくられ、会期終了後には他の用途に転用されます。



日本館の佇まいを変え、居場所をつくるテキスタイル

## 2. 愛おしいものをしまっておく、光に満ちた宝箱としての内部

内部

天窗から光の降り注ぐ日本間の内部空間は、光を柔らかく反射するタイルによって、愛おしいもの、大切なものをしまっておく宝箱のような空間をつくります。

「愛される建築」を考える上でヒントとなるインタビューの映像や、「愛される建築」のリサーチをまとめた模型を宝物として展示し、その意義や理念を伝えます。タイルは会期後に回収し「愛される建築」を目指す場所へと再利用されます。

インタビュー候補： 富田玲子（象設計集団） 播磨靖夫（財団法人たんぼの家理事長） 恵谷浩子（奈良文化財研究所） 検討中

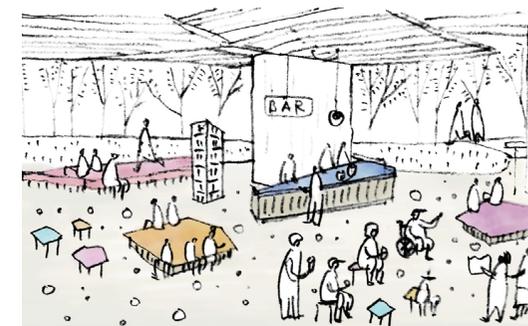


光を反射するタイルに包まれ、理念を伝える展示を鑑賞

## 3. 来場者との対話を通して、ともに考える場としての半屋外空間

ピロティ

「愛される建築」においては、ハードだけでなくそこで起こる活動や対話のプロセスも大切だと考えています。半屋外のピロティにはバーをしつらえ、居心地よく人々が集まり、ざっくばらんに語り合うことの出来る場をつくります。活動を通して場を育てていくことで、建築を生きたものにします。バーではトークイベントを定期的に行い、建築家、施工者、運営者、地域の使い手や研究者など、さまざまな立場の人が参加します。



ピロティの開放性や彫刻的な柱を生かした対話の場

## 「愛される建築」を考えるプロセス

プロセスにおいては、日本館を核として、出展メンバー同士の対話を通して「愛される建築」を考えます。「愛される建築」を考えるキーワード「佇まい」「寛容さ」「育てる」「土地の時間とつながる」「記憶」「個性」の可能性を広げていける様々な人や場所のインタビューやリサーチをし、メンバーにフィードバックすることで、展示アイデアを変化させ、ともに育てていきます。最終的には、皆で一つの居心地が良く生き生きとした日本館をつくることを目指しています。



ともに考え、案を発展させていく

出展メンバー

### 森山 茜

テキスタイルデザイナー・アーティスト

ストックホルムを拠点に、織る、染める、編むといったテキスタイルの特徴を生かし場所に隠されている可能性を引き出す作品をつくり続けている。シルクやウールなど自然素材を使い、布を介した循環も提案。



Mirage in the forest, KENPOKU2016



Seriously Fun, MOMA PS1, 2019

### 水野 太史

建築家 水野製陶園ラゴ

常滑を拠点に「考える、つくる、つかう」をテーマに、祖父から続くタイル工場を引き継ぎ、土地に根付いた技術を使い、焼き物ならではの特徴を生かしたオリジナルのタイル製作及び空間づくりを行っている。



水野製陶園ラゴの様子



一つ一つ手でつくられるタイル

### dot architects

建築家

「もうひとつの社会を実践するための協働スタジオ」コーポ北加賀屋を拠点に活動。誰もが能動的に住むこと・生きることに実感を取り戻していけるような建築、社会のあり方を模索し、実践している。



場の運営も手がける千鳥文化

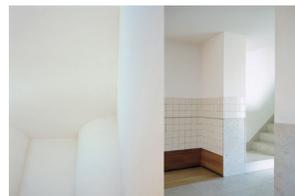


小豆島Umaki Campでのライブイベント

### 高野 ユリカ

写真家

土地や歴史、建築や空間、個人の物語のリサーチから着想し、歴史 (history / his-story) に応答する her-story をテーマに作品を制作している。建築、空間、環境、セノグラフィーの分野を中心に活動している。



Daily Landscapes / Alvaro Siza



白井晟一建築と林美子「秋の日記」

キュレーター

### 大西 麻貴・百田 有希

建築家 o+h

様々な地域で「愛される建築」を目指して設計・まちづくり活動を行う。本展示においては出展メンバーとともに「愛される建築とはなにか」を考えるプロセスを大切に皆で一つの展示をつくることを目指す。



丘のような児童遊戯施設コパル 伊東豊雄設計小金井の家をみんなの家に



### 原田 祐馬

デザイナー UMA/design farm

文化や福祉、地域に関わるプロジェクトを中心に、グラフィック、空間、展覧会や企画開発などを通して、関わる人々の理念を可視化し、新しい体験をつくりだすことを目指している。



団地色彩計画 鳥飼野々二丁目団地



福祉との連携 Good Job! Project

### 多田 智美

編集者 MUESUM

アートや建築、福祉など、さまざまな分野のプロジェクトのはじまりから参画・伴走し、書籍やタブロイド、WEB、展覧会やイベントなどの企画を通して、まだ可視化/言語化されていない価値や魅力を伝えている。



福智町図書館「ふくちのち」プロセス



次代デザイナーの教室 XSCHOOL